

高評価得た館山の実践

地域まるごと博物館シンポで

文化庁の地域活性化事業の一環として、「シンポジウム館山まるごと博物館」文化遺産を保存・活用するまちづくり」がこのほど、館山市内のホテルで開かれた。午前の

世界的なツバキ研究者だった同市南条の小原家庭園見学会には約70人が参加、午後のシンポジウムにも関心のある市民ら約60人が参加した。

文化財の保存・活用を単に観光利用の目で捉えるのではなく、地域の人の生活文化の歴史にどう関わって来たのかを学習したうえで、地域の有形無形すべての文化遺産を扱うことが求められている。市民が主体の地域まるごと博物館と連携することが大切」と語った。

後半のパネルディスカッションは、3人の登壇者がそれぞれの立場から館山まるごと博物館に對する思いを語り合った。県立中央博物館学芸員の林浩二さんは、「近年の国際博物館学会では、博物館の機能として、地域の有形無形すべての文化遺産を扱うことが求められている。市民が主体の地域まるごと博物館と連携することが大切」と語った。

てきた「館山まるごと博物館」の実践について、エコミュージアムの研究者や市民とともに検証し、これからの可能性と課題を見つめる機会となった。

長で横浜国立大学大学院の大原一興教授。この中で大原教授は「各地の取り組みの多くは、エコミュージアムの理念を十分に理解しているとはいえない。文化財の保存・活用を単に観光利用の目で捉えるのではなく、地域の人の生活文化の歴史にどう関わって来たのかを学習したうえで、地域の有形無形すべての文化遺産を扱うことが求められている。市民が主体の地域まるごと博物館と連携することが大切」と語った。

という視点から展開していることが大切。その点、館山まるごと博物館は活動に開く市民研究員の層が厚く、地域資源の点と点が線になり、さらに面へと広がっていくつながり方が、国際的にも通用するまちづくり事例である」と報告した。

最後に、主催者代表で千葉大教育学部で講師をしている愛沢さんは「館山まるごと博物館は、今までの市民に活動へ参加してほしい」と語った。

歴史文化遺産（ヘリテージ）の保存・活用を實踐する人材養成を目指し、「ヘリテージまちづくり講座」に取り組んできたNPO法人安房文化遺産フォーラム（愛沢伸雄代表）が、20年以上にわたる実践を踏まえ、講座の最終回として開催。多くの市民から賛同を得



シンポジウムで基調講演する大原教授＝館山

後半のパネルディスカッションは、3人の登壇者がそれぞれの立場から館山まるごと博物館に對する思いを語り合った。県立中央博物館学芸員の林浩二さんは、「近年の国際博物館学会では、博物館の機能として、地域の有形無形すべての文化遺産を扱うことが求められている。市民が主体の地域まるごと博物館と連携することが大切」と語った。

神奈川大学特別助手のチヨン・イルジさんは、

房日新聞 2014.3.4付

「館山まるごと博物館は、の在り方として、館山市活動を開く市民研究員では「地域まるごとオープンエアミュージアム館山歴史公園都市」を目標像と描いていることを紹介し、市民力と連携した活動実践を報告した。

最後に、主催者代表で千葉大教育学部で講師をしている愛沢さんは「館山まるごと博物館は、今までの市民に活動へ参加してほしい」と語った。